

BIOCITY

環境から地域創造を考える総合雑誌 ビオシティ

ARC Edition

2014
No.57

特集

市民による市民のための まちづくり

How to Make a City!

「ヒューマン・インフラ」の思想とデザイン

監修: Asakura Robinson Company

災害復興における地域力
思いやりのある交通デザイン
ネイチャー・プレイスケープ
まちを変えるアーティストたち

セッション
studio-L meets ARC

新連載 現代総有宣言! 秋道智彌
日本における commons の地平
—— 民俗学の視点から

BIOCITY ビオシティ

2014
57
ARC

特集 市民による市民のためのまちづくり 「ヒューマン・インフラ」の思想とデザイン



9784907083083



1920040025001

ISBN978-4-907083-08-3
C0040 ¥2500E

定価: 本体2,500円+税





How to Make a City!

戦略的まちづくり運動のひろがり



エリック・レシンスキー
Eric Leshinsky

「ベターブロック」運動

この数年、ヒューストンのいろいろなグループが年に一回集まり、都市計画家の展示場であり、市民によるまちづくりの実験であり、地元の祭りでもある、ユニークなイベントを開催してい

る。これは「ベターブロック」と呼ばれ、年々参加者が増え、今ではおなじみの光景になった「註」。「ベターブロック」の発想はシンブルである。まず、徒歩や自転車を通ると危ない道、空き地や空き家が密集するエリアなど、町の特徴的な場所を見つけ出し、参加者を集め、その場所の印象を一変させるイベントを企画して、その場所に付加価値を与えようというものである。二〇一〇年にダラスで始まったこのイベントは、アメリカの大きささまざまな都市にひろまり、その結果どの町でも、通りの景観をよくすれば、より住み心地のよい場所になるという、極めて単純なことを実証している。

ヒューストンでは、最初イベント会場周辺の住民から始まり、いまや参加者は地元の会社員、施設職員、デザイナー、プランナー、アーティスト、エンジニアにまで広がっている。この「ベターブロック」に参加すれば、自分たちの町がたった一日で魅力的に変わる様

を体験できる。イベントの主催者は、道路にペンキで白線やマーキングを描いて自転車専用レーンをつくったり、空き家を使って一日限りの店を出したり、小さな駐車場を公園に変えたりしている。

このような活動の実績は、他の町で同様のプロジェクトや実践を展開する「ベターブロック」の参加者にとって、情報の宝庫である。このイベントは、究極的に言えば公開教育や地域創造や実習の場でもある。時間もお金もほとんどかからないのに、そのインパクトは絶大である。従来の都市計画なら何年もかかるような町の住み心地の改善を、多くの人がその場で見たり経験することで、「ベターブロック」という発想がいかに有効かは一目瞭然である。

都市は、住民の文化的背景によって特徴づけられてきた（江戸っ子、ニューヨーカーに代表されるように）。しかし、現代の都市計画において、住民の手で生み出されてきたものは限られており、常に

役人、政治家、デイベロッパと、建築家やエンジニアなどの専門家にゆだねられてきた。住民自身が必要な建物がほしい、この道路には舗装が必要だと判断したことがあったらどうか。もちろん、都市計画が住民の利便性に応えていなければ、必然的に人口が減るという事例はみられるが。

「戦略的まちづくり」の歴史

二〇世紀後半、パリの都市計画が発表されると、「シチュアシオニスト」と呼ばれる前衛芸術家グループが、その計画は町を大通りで分断し、地図化するものと抗議した。一九五〇年代、ニューヨークを縦横する高速道路計画がもたらされると、再開発によって町が破壊されることに、一般の人々が草の根による反対運動を起こした。この活動のリーダーはジェイン・ジェイコブズという女性で、彼女の著書『アメリカ大都市の死と生』は、都市計画を住民の視線から見

直すための先駆的な指南書であり、それまでの都市計画思想を一変させた。近年の例で言えば、二〇一一年の抗議運動「ウォール街を占拠せよ」が記憶に新しい。この運動はアメリカ全土に飛び火し、都市を住民の手に取り戻そうと人々は公園や公共空間を占拠した。

世界中の各都市で、住民にとってその町がどのように見え、機能し、役立つかが、これまでになく重要性を帯びてきたことを示す事例が見られる。例えば、空き地やほとんど使われていない公共空間ではさまざまな催し物が開催され、あり合わせの材料と僅かな予算とボランティアの力で空き地が公園になり、自転車置き場が駐車場になり、町の穴場を住民が案内するユニークなツアーが実施されるなど……。このような住民による手作りの活動は近年各地で増加しており、「戦略的まちづくり」「註」と呼ばれている。参加

する人々はみな、最初は取り組みやすい催しに短期的に関わり、それがやがて町の長期的な変化へとつながればよいと考えている。

ヒューストンの市民活動

この「戦略的まちづくり」が、このヒューストンで盛んに行われていることは、驚くにあたらない。この都市の特徴は、人口密度が低く、インフラ計画は非常に大まかで（アメリカの大都市で唯一区画規制がなく、歴史的保存法も実質的には存在しない）、住民は多様で自営業が多いことである「註」。これらの特徴がもつとも顕著に表れているのは、おそらく広々とした町に、その場所を印象づける都市的な要素が何もないことだろう。郊外も同様で、潜在先から少し歩けば目的のものにたどり着くという、都市なら当たり前の機能がここにはなく、町を訪れる人は





空き家を使った一日限定のバー



歩道の路肩に置かれた植物。歩行者の安全と景観改善をはかる。



市内の穴場を案内するユニークな自転車ツアー



空き地をミニ公園に変えてマーケットやイベントを開催。



道路にペイントしたり鉢植えを置いて、歩行者の安全をはかる。

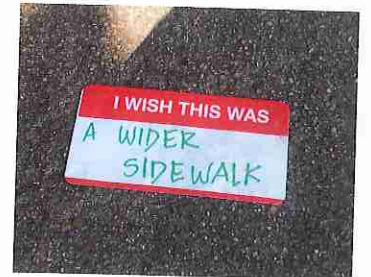


「ベターブロック」のための場所探し



空き家や空きビルが目立つエリア(ヒューストン市内)

「この歩道がもっと広いといいな」という要望



「ベターブロック」の会場に決まった空きビル

アーティストを招いて壁にグラフィティを描く





1台分の駐車スペース、支柱とロープ、ベンチ、鉢植えの木があれば「パークレット」の完成。

た。それらのほとんどが地元企業と市民グループとの共同作業によるものだった。それ以来、他の都市でも、最初はかなり奇抜な発想だと見なしていたが、これを公式に認めるようになった。

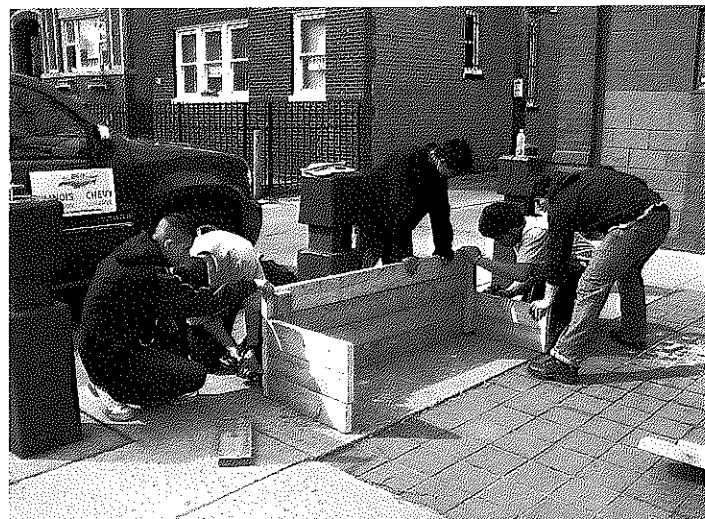
公共交通機関が乏しく車に依存してきたヒューストンこそ、「パークレター」の舞台にふさわしい。あの駐車場の数を見れば、疑問の余地はないだろう。二〇一三年、ARCの建築家や都市プランナーは、ヒューストン市に「パークレター」の導入を提案し、設

註
1 <http://www.betterblock.org/>
2 *Tactical Urbanism: Short Term Action, Long-Term Change*, Vols. I and II, 2012, New York: The Street Plans Collaborative.
3 ライス大学のキンダー都市調査研究所は、国勢調査によるとヒューストンは近年、アメリカで最も人種的・民族的に多様な都市になったと報告している。
4 <http://www.parkingday.org/>
5 Pavement to Parks Program. 都市計画課は「パークレット」のデザインガイドを作成し、URLで公開している。<http://sfpavementtoparks.sfplanning.org>

Eric Leshinsky

ARCアーバンデザイナー、プランナー。ボルチモア生まれ。ライス大学大学院建築学科修了。2009年、環境調査と設計を専門とするGRAPH社を設立。公共空間の必要性を訴えて転々とするアート展「Museum for Missing Places」(2005年)など、ソーシャル・デザインやアートを取り入れた多様な活動を企画。

ベンチがなければ、作る



「パークレター」のひろがり

口々に不便を訴えている。しかし、ヒューストンのユニークな点は、非常に緩慢な建築規制にあるといえよう。住宅はしょっちゅう壊されてより大きな家に建てかえられ、高速道路網はどんどん広がり、区画は細分化され、道路もすぐ閉鎖され他の都市ではあり得ないほど簡単に新設される。

「戦略的まちづくり」による実践は、ささやかな取り組みだが、まだ短い歴史のなかで、その斬新な発想と方法で、従来のインフラ計画のやり方にメスを入れた点で際立っている。つまり「戦略的」という点が重要なのだ。

これまで「戦略的まちづくり」がどのように展開してきたかを知るには、最も普及している「パークレター」(註4)の歴史をたどればよいだろう。二〇〇五年、サンフランシスコの設計事務所「リバー・グループ」が、市の中心部に公園など住民に開かれた公共の場がないことを訴えるため、駐車場に時間限定の公園をつくった。彼らは、パークレターメーカーの料金を支払って、この貴重な不動産を二時間ほど「貸し切り」にした。そこに青々とした芝生とベンチを持ち込み、道路(および隣接する駐車場)との仕切りとして鉢植えの木を置き、ロープを張っただけの、ごく簡素なものであったが、立派に公園と呼ばれ、写真に撮って世間にアピールするには効果的な風景を醸し出した。

二時間後に、芝生を剝がし、ベンチと植木、ロープなどを荷台に載せて、その場が片付くやいなや、このプロジェクトの写真がインターネットで瞬く間にひろがり、設計事務所には他の町から同じものをつくってほしいという要望が殺到した。しかし、彼らは同じものではなく、その町のもつ雰囲気や環境を活かした公園づくりを推奨した。彼らは「公園づくり」のマ

ニユアルとすぐに回覧できるマニフェストをつくった。それ以来、年に一度「パークレター」を設ける動きが世界各地にひろまった。二〇一〇年、サンフランシスコの都市計画課が「路上公園計画」でこの公園運動を正式に採用し、「パークレット」(註5)と名づけられたユニークな公園が、サンフランシスコ市内に三八か所も造られ

「パークレター」のシンボル、青い風船

